

## 鎌倉將軍と和歌の研究（概要書）

スピアーズ スコット

本論は実朝以後、代々の鎌倉將軍と和歌の関係について論究した。特に、將軍と和歌における制度的な側面を重視して、將軍はなぜ、どのやうに和歌に接して、將軍歌壇を形成したか、そして將軍が和歌を詠むことによつて、どのやうな効果が期待されてゐたかについて論じた。その中で、従来の研究に批判を加へると同時に、近年の和歌文学研究・歴史学研究を反映して、多角的に問題に取り組んだ。考察は、主として『吾妻鏡』等の歴史資料を通して行はれ、『吾妻鏡』をどう読むかを重要なテーマとした。

『吾妻鏡』は、主に將軍の公的姿を描くのだが、記録に挙がる頼朝から宗尊親王までの代々の將軍を知るのに、これ以上の好資料がないと考へる。そのため、大いに考察に用ゐた。これについて、詳しく序に述べた。

本論は序、第一部「源実朝と和歌の問題」、第二部「摂家將軍・宮將軍と和歌の問題」、第三部「勅撰作者部類」の研究、跋から構成されてゐる。

序において、本論の主題について述べた上に、これまでの鎌倉將軍と和歌に関する従来の研究を概観した。ここでは、本論で詳しく論じない源頼朝と宗尊親王についての近年の研究を紹介して、鎌倉將軍と和歌の歴史についての全体像を提示した。また、本論における方法論と、『吾妻鏡』の使用について詳しく述べた。また、歴史仮名遣ひの使用について触れた。

第一部・第二部は第三代將軍源実朝・第四代將軍九条頼経・第七代將軍惟康親王を中心として、従来の研究への批判と發展を行ひ、そして空白を埋め、鎌倉將軍と和歌の全体像を描いた。

第一部「源実朝と和歌の問題」では、近年の実朝研究、特に五味文彦が提示した新しい実朝の為政者像と、それに刺激され実朝を再検討した和歌文学研究（特に志村志郎、麻原美子、そして今関敏子）を基に、実朝が歌人として歩み出した元久二・三年と、実朝の和歌理念が定まつたと考へられる建暦三年について論じた。

第一章「実朝の二つの出発点——歌人形成における他律と自主について——」では、実朝が元久二年（一一〇五）に『吾妻鏡』が記録する十二首和歌の詠歌とその背景について論じた。そこでは、実朝がまだ積極的に和歌に取り込む姿がなく、むしろ緊迫した当時の鎌倉で、安定を願つて和歌を詠んだのではないかと論じた。背景には、御家人を文化化しやうと企む北条氏の姿があり、必ずしもこの時点で実朝の自主性が認められないことを指摘した。その後、翌元久三年に実朝の和歌「初学」歌会が行はれた。この和歌「初学」からの歌が承元三年（一二〇九）に実朝が定家に送つた三十首歌の中に含まれたが、元久二年の十二首和歌が入つてゐなかつたといふ。その理由は明らかではないが、おそらく実朝の「初学」、則ち歌人としての初舞台は、実朝にとつて、歌人としての本当の出発点だと捉へたことによると考へられる。そのため、十二首和歌と初学歌会を意義が異なる二つの出発点として、それぞれの意義と、以後の歌人実朝への影響について論じた。

第二章「実朝の学問所——理想政治とその制度について——」では、建暦三年（一二一三）二月二日に実朝が設立した学問所について論じた。先行研究では、学問所は実朝の和歌趣向のために造られ、また北条氏等有力御家人が番衆として加はつてゐることから、政治色

が強く、実際には有名無実の機関だったのではないかと言はれてきた。近年では、その見解に訂正があり、実際に將軍の個人的な諮問機関として機能したものの、制度としての研究は未だに行はれてゐない。学問所は唐の太宗が造った文学館と十八学士をモデルにした。

その理由は実朝の偉人憧憬に由来すると考へる。学問所に関する『吾妻鏡』の記述と、文学館に関する文献から、両方の制度等を比較すると、明らかに実朝は文学館を模したことが分かる。文学館に登用された十八学士は様々な専門を有したことが『旧唐書』等の記述から確認できる。一方、学問所の番衆について、一人一人を検討した結果、番衆も多様であることが明らかになった。その中で和歌がかなり重要な位置を占めてゐたことも確認できる。学問所は、実朝が為政者として必要とする種々の専門を有した御家人を番衆として加へ、指摘されるやうに、個人諮問機関としてゐただらうが、その目的は和歌一つに留まらず、実朝が自分の理想政治を実現しやうとする準備段階として造つただらうと考へられる。ただ、和歌が重要な位置を占め、以後の実朝の為政において重要な要素だったことを指摘した。最後に、学問所が以後の番衆制度に与へた影響について述べた。

第三章「建暦三年の実朝——理想と苦悩、そして『金槐和歌集』について——」では、『吾妻鏡』が記録する建暦三年の一年間を考察して、この年に実朝が自らの理想政治を実現しやうとしたことについて論じた。建暦三年の重要性について先行研究を紹介した上で、一年の分析を行つた。最初に、実朝の学習と雅事について論じた。学問所について前章で得た結論を紹介した上で、仏教・和歌等の学習に関する記述を検討した。また、実朝の様々な雅事（歌会、方違へ、装束、絵画等）が一年を通して見られるため、五月の和田合戦を境に実朝の心境に変化が生じたとする従来の論を否定して、一年における実朝の一貫性を指摘した。次、実朝が女房を積極的に幕府政治に登用したことについて論じた。この年に初めて実朝の女房の姿が現れ、その活躍が様々だった。特に重要なのは、本来御家人だけが対象とされた勲功を、実朝が女房にも与へたことを確認した。その意義と、御家人の反応について論じた。続いて、和田合戦について考察した。特に注目したのは、合戦の際に行はれた和田・幕府両側の様々な祈祷だ。これらの祈祷は神を自軍の見方に付けるための、一首の戦闘行為だったことが下村周太郎の研究で明らかになった。実朝も和田合戦の際に、鶴岡八幡宮に願書を奉つたが、その時、和歌を願書に書き添へたことが『吾妻鏡』に記録されてゐる。実朝は和歌を利用して、八幡神を味方に付けやうとしたことになり、従来の戦闘を忌避する実朝とは全く違ふ像が浮かび上がった。建暦三年の分析の最後に、実朝と武芸の関係について論じた。実朝は、武芸に無関心だったわけではなく、むしろ文武両道を目指してゐたことを指摘した。しかし、実朝は文を重んじ、そして御家人が頼朝と頼家で経験したのとあまりにも違ふ政治を行はうとしてゐたため、御家人の理解を得られず、結果として厳しく批判された。その批判は『吾妻鏡』において長沼宗政に代表されてゐるが、宗政の批判の内容について考察して、そこから読み取れる実朝の理想政治について論じた。本章の結論において、実朝の家集『金槐和歌集』が、その理想政治の一環として、この年の暮れに成立して、集に込められた思ひは、必ずしも孤独で哀愁なものとは限らず、むしろ將軍として自らが背負ふ重荷を表現したものだと言論じた。

第二部「摂家將軍・宮將軍と和歌の問題」では、実朝を將軍職に継いだ九条頼経と、鎌倉將軍歌壇の衰退期と言はれる惟康親王時代について論じた。

第四章「摂家將軍初代藤原頼経について——將軍權威と和歌の試論として——」では第四

代將軍九条頼経と和歌について論じた。頼経と和歌については、これまで『吾妻鏡』が記録する歌会の主催等が知られてゐたが、従来の研究はこれを指摘する程度で、頼経本人と和歌に関する研究は殆どない。ここでは、頼経に関する近年の歴史学の成果を駆使して、再検討した。最大の問題となるのは、実朝の暗殺のために生じた源氏將軍の終焉と、摂家將軍への移行のため、それまでに築かれた源氏將軍觀をいかにして生かしながら、摂家將軍に將軍としての權威を付与するかだったと考へられる。この權威問題の存在は、実朝暗殺直後から生じた、源氏と名乗る將軍職志願者（謀叛者）が続出して、そして頼経が將軍職に就任した頃から、將軍として存在が軽んぜられたと考へられる事件が繰り返されたことから確認される。『吾妻鏡』を中心に、北条氏等幕府が取った様々な權威付与の方策について検討した。頼経が寅の年・月・時に生まれたこととその意義や、武芸との関係について論じたが、特に重要なのは、頼経を源姓に改姓させる計画と、頼朝の前例に倣った叙爵の初任である。前者は実現を見なかつたものの、後者は藤原定家の日記『明月記』からその内実が確認され、摂政家である九条家の前例よりも、前代將軍の例が重要視されてゐたことが分かる。源氏將軍の記憶が幕府と御家人にとつて重要だっただけに、幕府としては、何とかして頼経を源氏將軍と同様な權威を与へたかつたことが読み取れる。これを背景に頼経が將軍職就任直後から開催した数多くの歌会を考へると、その主要な目的は御家人との交流ではあるが、そのやうな交流の前例となるのは、実朝の幕府御会でだったと考へられる。このやうに、頼経の歌会を、源氏將軍に倣つた將軍權威付与の策として理解することができると論じた。

第五章「頼経の和歌と歌壇 ―解釈と考証、そして歌会の記録について―」では、これまでに紹介されてゐなかつた頼経の和歌四首について検討して、頼経主催歌会についても考察した。頼経は従来、和歌をあまり詠まなかつたのではないかと言はれてきたが、『万代和歌集』と『秋風和歌集』に計四首が確認できる。ここでは、四首の解釈と考証を行った。『万代和歌集』に入る二首の考証から、頼経は將軍在職中に和歌を詠んだことが分かつただけではなく、將軍であつた頃に主催した歌会にも出詠したことが確認できた。また、勅撰集・私撰集・私家集に見られる頼経主催の歌会について検討した。その検討から、京・鎌倉の歌人を交へて、寛元元年（一二四四）に行はれたと思はれる月十首が頼経歌壇の最大の催しだったことを論じた。また、頼経は一時期、毎月歌会を開催してゐたことが分かり、將軍の歌会は頼経時代に、実朝時代以上の盛況を見せてゐた姿を捉へた。同時に、『吾妻鏡』が記録する歌会は、開催されたごく一部分に過ぎず、頼経は実際にどれだけ歌会を開いたかは分からない。頼経が従来考へられてゐた以上に積極的に歌会を開いてゐたことを物語る。

第六章「惟康親王の周辺と和歌 ―將軍歌壇の再検討―」では、第七代將軍惟康親王について論じた。惟康の来歴・子孫、そして源氏賜姓について考察した上で、惟康と和歌について論じた。惟康の將軍在任期は將軍歌壇の衰退期と言はれてをり、現に將軍主催の歌会や、惟康自身の詠はこれまでに確認されてこなかつた。しかし、惟康周辺の文学・歴史資料を調査した結果、將軍歌壇は、衰退してゐながらも、存続してゐたことが確認できた。その証拠の一つに、歌人として知られる宇都宮景綱の家集『沙弥蓮愉集』に見られる「鎌倉二品親王家十首歌」等の詞書から、惟康主催の十首歌の存在を確認することができる。また、惟康親王家右衛門督が、惟康に仕へた女房だったと同時に、勅撰歌人でもあつたこ

とが確認でき、右衛門督はおそらく惟康父宗尊に仕へた女房だったことを考証した。惟康と景綱・右衛門督の関係、当時の鎌倉における文学環境の考察等を通して、惟康時代の将軍歌壇について論じた。

第七章『六代勝事記』の政道観と鎌倉将軍 ―その天皇観との比較を通して―では、『吾妻鏡』とは別の角度から、鎌倉将軍の人物像を考へるため、『六代勝事記』における将軍観について考察した。『六代勝事記』について、これまで伊藤敬や弓削繁がその政道観を、『六代勝事記』の天皇観を中心に論じた。ここでは、『六代勝事記』の天皇観を、本文に則して再確認した上で、視点を将軍に移して、『六代勝事記』の政道観は天皇だけではなく、将軍にも適用されてゐることを指摘した。その見地から、天皇と将軍の関係の捉へ方と、『六代勝事記』成立当時、次期将軍として鎌倉に下向した頼経と、幼帝後堀河天皇にどのやうな関係を望んでゐたかについて論じた。

第三部『勅撰作者部類』の研究』では、『勅撰作者部類』について論じた。『勅撰作者部類』とは、『古今和歌集』以下の勅撰集に入る作者を身分別に分類して、その伝記と各集の入集状況を記す資料である。南北朝に成立したため、鎌倉・南北朝期の勅撰集に入る歌人を知る上で重要である。しかし、これまでに、その本文と注記について研究されることが少なかった。ここでは、『勅撰作者部類』を根底から見直して、その資料的価値を再評価した。

第八章『勅撰作者部類』の諸問題 ―その改編を中心に―では、『勅撰作者部類』の伝本研究を通して、『勅撰作者部類』の本文とその性格について論じた。第一に、伝本研究を通して明らかになったのは、『勅撰作者部類』が大きく二つの系統に別れることだ。則ち、建武四年（一一三三七）に元盛法師が編み、康安二年（一一三六二）に惟宗光之が増補した『旧作者部類』（元盛が編んだものは伝はず）と、『旧作者部類』の内容を増補したり、書き改めたり、削除したりした江戸時代成立の『改編作者部類』である。現在、活字になってゐる『勅撰作者部類』は全て『改編作者部類』の本文に基づいてゐる。しかし、『改編作者部類』の本文に、様々な問題点があることを紹介して、従来指摘されてきた『勅撰作者部類』の不正確さは改編を通して起こったことだと論じる。その上で、『旧作者部類』は鎌倉・南北朝期の歌人について、かなり正確な情報を伝へてゐることを明らかにして、今後の『勅撰作者部類』の研究は、『旧作者部類』を中心に行ふべきだと提案した。

第九章『勅撰作者部類』注記考 ―「至く年」は何を意味するか―では、『勅撰作者部類』に見られる特殊な注記の一つ、「至く年」とある注記の意味について論じた。この注記は『改編作者部類』に見られないが、それを底本とする活字版『勅撰作者部類』は、『旧作者部類』からこの注記を復活させてゐる。そのため、研究者の目に止まることがあった。しかし、その意味については不明とされてきた。とはいふものの、没年注記ではないことは、竹居明男の研究で確認されてゐる。この「至く年」注記は四位・五位・六位の作者に見られるものであり、ここでは『金葉和歌集』から『新古今和歌集』までの初出作者で、この注記が付されるものについて調査した。その結果、「至く年」注記はやはり没年注記ではなく、朝廷への出仕の最終年を指すことが分かった。今後の研究のため、調査対象とした全作者に関する資料と調査結果を付した。

跋では、本論の達成と反省点、そして今後の課題について述べて、各章の初出一覧を付した。